

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530159

研究課題名(和文)近代中国における社会の武装化と中国共産党の武装闘争—中央革命根拠地の事例分析

研究課題名(英文)The militarized society of modern China and the armed struggle of the Chinese Communist Party

研究代表者

阿南 友亮 (Anami, Yusuke)

東北大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：50365003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、内戦期の中国共産党の軍隊が傭兵、民間自衛団体、匪賊といった当時の社会が抱えていた既存の武力に大きく依存していたという仮説をたて、その仮説を検証するために、中央革命根拠地(江西省・福建省)における共産党の武装闘争に関する実証研究をおこなった。その結果、共産党が結党直後から敵軍の将兵を取り込むための工作(軍内政治工作)を推進し、その具体的成果として、中央革命根拠地をめぐる戦いの過程で約二万人もの国民党軍将兵を味方に引き込むことに成功したことをあきらかにした。また、共産党を殲滅しようとした中国国民党が福建省において既存の武力の管理・動員に悪戦苦闘していた様子も浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：The main goal of this research project was to analyze the relationship between the Chinese Communist Party (CCP) and various armed forces within the Chinese society during the civil war period. In other words, this research project sought to reveal the intimate relationship between the CCP and armed forces such as mercenaries, militias, and bandits.

By examining various primary sources including internal documents of the CCP, we discovered that the Central Revolutionary Base of the CCP located in Jiangxi and Fujian, heavily relied on mercenaries which had defected from the Chinese Nationalist Party (CNP). We also found out that the CCP had developed a system aimed to conduct political activity within enemy units since the early 1920s. This kind of activity enabled the CCP to absorb thousands of mercenaries and allowed the CCP to continue its armed struggle against the CNP.

研究分野：中国近代政治史

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：中国近代政治史 中国内戦 中国革命 社会の軍事化 中国共産党 中国国民党 地域社会史 軍隊

1. 研究開始当初の背景

中国革命に関する定説は、現在、複数の側面から再検証されている。本研究は、特に軍隊に焦点をあて、中国共産党がいかにして軍隊を建設したのかという問題をあきらかにすることをつうじて、定説の再検証を試みるものである。従来の定説では、共産党が農村で広範に実施した「土地革命」とよばれる社会変革が共産党の軍隊建設の重要な前提とされてきた。つまり、土地の再分配などの恩恵を受けた農民が共産党の軍隊の母体となったと考えられてきたのである。

しかし、近年、この定説に関して、二つの問題が指摘されるようになった。一つは、土地革命が実際にどこまで実行されたのかという問題である。一九九〇年代以降、共産党の内部文書を用いた複数の研究では、内戦期（一九二七年～一九四九年）の土地革命が往々にして計画どおりに進まなかったという実態が浮き彫りにされた。これにより、中国共産党が中国国民党を軍事的に圧倒することができたのは土地革命を契機とする農民の支持であったという定説の信憑性が、少なからず揺らぐこととなった。

もう一つの問題は、内戦期の共産党の軍隊を対象とした実証研究の蓄積が極めて乏しいという問題である。これまでの中国研究では、土地革命をつうじて共産党を支持するようになった農民によって共産党軍が支えられていたという共産党の自己申告を鵜呑みにする傾向が顕著であった。換言すれば、共産党の軍隊が実際にはどのような人間によって構成されていたのかを検証する動機が非常に弱かったのである。ところが、肝心の土地革命が実際に成功したのかどうか非常に微妙な問題になってくるに伴い、共産党軍の内実を探る研究の学術的重要性が浮上ることとなった。

内戦における共産党の国民党に対する勝利が社会変革と結びついてきたという認識

があったからこそ、共産党の勝利は「革命」（社会変革を伴う政治体制の再編）という評価を受けてきた。仮に国民党を撃退した共産党の軍隊が社会変革との接点が弱いということになれば、中国革命に関する既存の理解は、根本的な見直しを余儀なくされることになる。これは、内戦の結果誕生した中華人民共和国の近代性をめぐる評価にも必然的に大きな影響を及ぼすことになる。

以上のような認識に基づき、本研究の代表者である阿南友亮は、二〇〇七年から二〇一一年にかけて科研費（若手研究 B、課題番号 19730115）の助成を受けて、革命神話の舞台である広東省東部における共産党による軍隊建設に関する研究をおこなった。広東省の共産党が作成した内部文書を調べた結果、共産党が成功例として宣伝してきた広東省東部における土地革命が、実際には計画どおりに進展せず、農民を共産党の軍隊に動員する契機とならなかったことがあきらかになった。

広東東部の共産党は、同地域の社会の武装化を象徴する存在であった宗族の自衛団体を吸収する形で軍隊を建設していた。また、様々な理由・経緯で国民党や軍閥の軍隊を離脱した傭兵部隊も広東東部の共産党軍の主力を構成していた。要するに、広東東部の共産党の軍隊は、社会変革の成果ではなく、高度に武装化した社会に豊富に存在した傭兵や自衛団体などの既存の武力に大きく依存した形で形成されていたのである。

阿南は、こうした広東東部の事例に立脚し、高度に武装化した社会に存在した傭兵、自衛団体、匪賊、秘密結社といった武装勢力が内戦の帰趨を左右する要因となったのではないかと問題提起をおこなってきた。

これに対し、学界からは主として二つの課題が提示された。一つは、広東における共産党の軍隊建設の手法がほかの地域・時期についてもあてはまるか否かを調べるという課

題である。もう一つは、国民党も同じような手法で軍隊を建設していたのならば、何が勝敗を分けたのかという点をあきらかにするという課題である。本研究は、これらの課題に取り組むための研究活動の第一歩と位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究では、上記の研究課題を念頭に入れ、中国国民党と中国共産党の間で戦われた内戦の前期（一九二七年～一九三七年）の決戦場となった共産党の中央革命根拠地（江西省東部・福建省西部）における武装闘争の実態を探ることに研究の主眼を置いた。

一九三七年における日中戦争の勃発まで続いた内戦の前期は、これまで「土地革命戦争」とも呼ばれ、共産党が土地革命に基づく軍隊建設という手法を確立した時期であるとされてきた。一方、「土地革命戦争」という評価の重要な根拠となってきた広東東部では、土地革命が実際には共産党の軍隊建設の主要な基盤とはなっていなかったことが判明した。

このような広東の事例から導き出した仮説、すなわち、共産党の軍隊建設は、主として社会が抱えていた既存の武力に依存していたという仮説の妥当性を中央革命根拠地の分析をつうじて検証することが、本研究の主たる目的であった。また、国民党の戦争遂行体制にも目を向け、最終的に内戦に破れるという結末につながる要因を中央革命根拠地攻防戦に見出すことができるかどうかを探ることも本研究の重要な目的であった。

3. 研究の方法

江西省東部と福建省西部の山岳部を中心に形成された中央革命根拠地をめぐる戦いでは、共産党が最終的に敗退した。しかし、共産党は、同根拠地を放棄するまでの間、国民党による掃討作戦を四度撃退し、国民党に苦戦を強いた。兵力の面で圧倒的に有利であ

った国民党を苦境に陥らせた共産党の軍隊は、どのようにして建設・維持されていたのか。また、共産党の軍隊を江西省・福建省から駆逐するのに悪戦苦闘した国民党の陣容はいかなるものであったのか。これらの点を究明するための判断材料を揃えるべく、本研究では、一次資料を積極的に収集するとともに、江西・福建両省での現地調査をおこなった。

一次資料の収集は、研究代表者の阿南友亮（東北大学）、研究分担者の山本真（筑波大学）、研究協力者の岩谷蔭（防衛研究所）の三人体制で、中国、台湾、米国において実施した。

今回入手した中国共産党系の史料のなかで特筆すべきは、江西省・福建省の档案館（公文書館）がそれぞれ共産党内部での閲覧を目的として刊行した『革命歴史文件彙集』である。これらは、内戦期の共産党の内部文書を多数内包しており、定説の再検証をおこなううえで重要な判断材料を提供している。

中央革命根拠地の共産党が作成した文書の一部は、同根拠地の掃討作戦の指揮官を務めた陳誠によって大量に収集され、それが米国のフーバー研究所において「陳誠文庫」として保管されている。これをマイクロ・フィルム化したものがもともと慶應義塾大学図書館にあったが、経年劣化により閲覧不可能となっていた。そこで、今回フーバー研究所から「陳誠文庫」のマイクロ・フィルムを購入し、東北大学図書館で保管することとなった。この他にも中国国内で出版された資料集は多数ある。ここでそれらを全て列挙することは控えるが、最も有名なものとしては『中央革命根拠地史料選編』（江西人民出版社、一九八二年）があり、最新のものとしては『中央革命根拠地歴史資料文庫・党的系統』（江西人民出版社、二〇一一年）を挙げることができる。

代表者、分担者、協力者が合同または個別

に訪問した米国と台湾の機関は、以下のとおりである。

米国：コロンビア大学、ハーバード・イェンチン研究所、フーバー研究所、イエール大学、ドリュー大学。

台湾：国史館、法務部調査局、中央研究院近代史研究所、政治大学、東呉大学、台湾大学、衛理神学研究院。

これらの機関で、共産党の内部文書・刊行物、国民党の公式文書、中央革命根拠地の掃討作戦に従事した国民党幹部（例えば、熊式輝など）の個人文書、江西・福建で布教活動をおこなっていた宣教師の記録といった資料を閲覧・入手した。海外での資料調査の際にコピーや撮影によって得た資料は、最終的に四千枚前後に達した。

本研究では、新たに入手した各種資料の分析をおこないつつ、二一三年八月に十日間の現地調査を実施した。江西・福建に残る中央革命根拠地関連の遺跡や古戦場を広範に網羅した現地調査によって得られた情報は、史料の内容を正確に理解するうえで非常に役立った。

以上のような、資料収集、資料分析、現地調査に基づく研究の成果は、二一三年度に学会報告および学術論文といった形で発表した。以下では、その内容を紹介する。

4. 研究成果

一九三一年一二月、中央革命根拠地を包囲していた国民党軍の拠点の一つであった江西省寧都県において、国民党軍第二六路軍の将兵約一万七千人が一斉に蜂起した。このいわゆる「寧都蜂起」により、第二六路軍の主力は、共産党の陣営に加わった。内戦前期の共産党軍の最大兵力が約一〇万人であったことに鑑みれば、この新たな兵力は極めて貴重であったといえる。

第二六路軍の将兵は、もともと中国西北部に盤踞していた馮玉祥という軍閥の私兵であった。この傭兵集団は、馮玉祥が国民党に

入党したことを契機に国民党軍に編入され、馮玉祥が蒋介石との抗争に破れて失脚した後、蒋介石の命令に従って中央革命根拠地の包囲戦に投入された。つまり、寧都蜂起によって共産党軍に加わったのは、国共の内戦が勃発する以前から存在した傭兵集団だったのである。

このことは、中央革命根拠地においても共産党が社会変革とは直接関係のない既存の武力に一定程度依存していたことを物語っている。研究代表者の阿南は、圧倒的に有利な立場にあるはずの国民党軍に叛旗を翻し、敢えて苦しい立場にあった共産党軍に加わった第二六路軍について詳しく調べれば、共産党の軍隊建設ならびに内戦における国共の勝敗を分けた要因を見つけだせるのではないかと考え、第二六路軍と共産党との関係に研究の焦点をあてた。

その結果、中国共産党がほぼ結党直後からコミンテルンの指示に基づき既存の軍隊を瓦解させる、あるいは、味方につけるための工作に大きな関心と労力を向けていたという実態が浮き彫りとなった。「軍内政治工作」などと呼ばれたこうした取り組みの存在は、先行研究においてもしばしば指摘されてきた。しかし、今回の研究では、コミンテルンが軍内政治工作を土地革命による農民の動員と同等に重視していた点、そうしたコミンテルンの意向に従う形で中国共産党が国民党軍のみならず各地の軍閥の軍隊にも計画的に工作員を多数送り込んでいた点、その一環として馮玉祥の軍隊に送り込まれた党员（劉伯堅など）により実施された宣伝や福利厚生に関する工作が結果的に第二六路軍による寧都蜂起につながった点をあきらかにした。

要するに、共産党は、土地革命をつうじた軍隊建設とは異なる軍隊建設の手法、すなわち、既存の軍隊の将兵を自陣に引き込むという手法を早い段階から実践し、寧都蜂起はそ

うした地道な取り組みがもたらした結果であったということが判明したのである。社会に存在する既存の武力を利用することが、各地の共産党による場当たりのでその場凌ぎの選択ではなく、共産党中央指導部の戦略の一環としておこなわれていた点をあきらかにしたことは、本研究の重要な成果の一つといえよう。

では、このような工作は、なぜ効果的であったのか。破産・貧困農民や都市の失業者を多く含んでいた兵士たちを「プロレタリアート」と同列に扱い、その待遇改善を宣伝・実践した共産党の軍内政治工作が魅力に富んでいたことは、共産党に寝返った多数の将兵の証言から読み取れる。それは、すなわち、軍閥や国民党の軍隊における彼等の待遇が往々にして劣悪であったことを意味している。

実際、当時の政府軍ともいうべき立場にあった第二六路軍が中央革命根拠地の包圍戦の際に直面した状況は過酷極まりないものであった。道路もまともでない山岳地帯での作戦は、それだけでも十分に過酷なものであったが、蒋介石に刃向かった馮玉祥の部下という経歴が仇となり、食料・弾薬・医薬品の補給が滞りがちであった。このため、第二六路軍は、病死者だけで一日に数十人に達するという苦境に陥ったのである。第二六路軍将兵が残した記録から、当時の国民党軍が兵力のうえで共産党軍を圧倒していたものの、決して一枚岩ではなく、蒋介石の直系部隊以外は、待遇面で非常に不利な立場に立たされていたことがわかる。こうした内情を抱えた国民党軍に対する共産党の政治工作が看過しえない効果を発揮したことは、寧都蜂起が証明している。

研究分担者の山本が浮き彫りにした福建省の武装化された社会の実態も、国民党の脆弱性を考えるうえで重要な要素となる。福建省では、宗族の自衛団体、匪賊集団、秘密結

社の武装集団がひしめきあっており、相互に衝突を繰り返すと同時に、国民党に対する面従腹背が顕著であった。国民党が福建を統制するために依存した現地の軍隊は、ほぼ例外なく匪賊をかき集めたものであり、現地の秩序を維持するよりは、かき乱す存在であった。新たな兵士を獲得するための国民党による動員工作は、大規模な兵役忌避や反乱を引き起こし、順調に展開されなかった。

要するに、中央革命根拠地に対する包圍殲滅作戦の主戦場となった福建省における国民党の基盤は、非常に不安定なものだったのである。山本の研究からは、武装化された社会の平定と安定した管理・動員体制の構築が十分に達成されないまま共産党や日本軍との戦争に突入した国民党の戦争遂行体制の脆さが如実に浮かび上がってくる。

以上のように、本研究では、中央革命根拠地をめぐる国共の武装闘争の分析をつうじて、敵軍を対象とした政治工作が共産党の軍隊建設において重要な位置を占めていた点、国民党の戦争遂行体制の杜撰かつ不安定な実態が共産党の軍内政治工作の効果を補強していた点をあきらかにした。これらの点が内戦全体の帰趨にどの程度作用したのかを探ることが、本研究のメンバーにとって今後の重要な研究課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 山本真「二世紀初頭の福建省南西部客家社会と革命運動-宣教師文書から読み解く」、『歴史評論』第 765 号、2014 年 1 月、47~57 頁、査読あり。
2. 阿南友亮「中国共産党による軍隊を対象とした政治工作の起源と初期の展開」、『法学』第 77 巻第 4 号(東北大学)、2013 年 10 月、1~46 頁、査読なし。

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 阿南友亮「敵軍に加担した傭兵をいかにして引き抜くか? 民国期中国の武装化した社会と中国共産党による軍隊建設に関する一考察」、アジア政経学会東日本大会分科

会「近代中国の武装化した社会と革命政党-革命に与した武装勢力の実態を探る」(会場：早稲田大学) 2013年10月12日。

2. 山本真「民国時期、福建省における武装化した社会と国民党政府による戦時動員」,
アジア政経学会東日本大会分科会「近代中国の武装化した社会と革命政党-革命に与した武装勢力の実態を探る」(会場：早稲田大学) 2013年10月12日。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.law.tohoku.ac.jp/~anami/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿南 友亮 (ANAMI, YUSUKE)

東北大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：50365003

(2) 研究分担者

山本 真 (YAMAMOTO, SHIN)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：20316681

(3) 研究協力者

岩谷 蔭 (IWATANI, NOBU)

防衛省防衛研究所・戦史研究センター・主任研究官

研究者番号：なし